

自己評価報告書(最終報告)

報告者

芸術系コース(音楽)
／頃安 利秀

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ. 学長の定める重点目標

Ⅰ-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

平成20年より大学院の授業科目(広領域コア科目)「教師のための声とからだことば」を担当しているが、この科目は、毎年80名を越す受講生を受け入れ、学生から高い評価を受けている。学校教員として授業を行うには様々な知識だけではなく、それを言葉で音声にして子どもに伝えていかなければならない。そういう意味で発声法は大変重要な意味をもつものである。歌うことにとどまらず、朗読や会話における発声法について、これまで以上に力を注ぎたい。学部においては、音楽関連の授業において、学校教員として必要な音楽実技能力の向上をこれからも目指していく。

- ①大学院の広領域コア科目「教師のための声とからだことば」の授業において、受講生の発声を良くしていくことにこれまで以上に力を注ぐ。
- ②学部の音楽関連の授業において、学校教員として必要な実技能力と表現能力を高めていくことに力を注ぐ。

2. 点検・評価

①大学院の広領域コア科目「教師のための声とからだことば」の授業において、人間としての自然なからだのあり方を基本に、声を出すことについて講義と実習を行い、学生一人ひとりの声とからだについて指導を行った。レポートを読む限り、学生から教師にとってまた個人としても大変有益な授業であったという高い評価を多く受け取った。②学部の音楽関連授業においては、音楽の基礎的なところから「人間とは」また「音楽とは」という問いかけをしながら、自然な声の出し方を指導し、自分の歌唱表現として、また教師としての歌唱指導の方法としての能力になるように指導した。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

教育支援に関する目標は、学生が自ら判断し自らを改善していけるようなプログラムで授業を進めていくことを目標として、次のようなことを計画する。

- ①授業において学生の演奏や表現活動を自ら省察できるような工夫を考える。
- ②学生同士がお互いに批評し合っていけるような授業の工夫を考える。

学生生活支援に関する目標は、担任する学生、また指導学生と個々に話をする機会を多く設け、学生個々が、それぞれの目標に向かって自ら進めるように支援する。

- ①前期後期それぞれで学生との懇談を行い、自らの目標を明確にするように支援する。
- ②合唱団タドポールの顧問として、学生への適切な指導を行う。

2. 点検・評価

教育支援:①②授業においてお互いの演奏を聴き合う状態にはもっていくことができず、個々の演奏を仕上げるのが先決問題になった。これからの課題としたい。

学生支援:①担当する学部2年次生学生とは前期後期とも懇談を行うことができ、学生個々の状況を把握できた。②合唱団タドポールの指導については、大学祭や合唱祭、また鳴門市の「第九」の合唱等の指導を行った。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

研究においては、これまで行ってきたドイツ・バロック期及びロマン派の声楽曲の実践的研究をさらに進めること。また声楽のみならず、朗読や会話における発声法についても、研究を進めていきたい。そしてそのことを授業の中で学生の指導に生かしていけるように、効果的な指導法についても研究していきたい。

- ①バッハのカンタータや受難曲の演奏実践研究を行う。
- ②ドイツ・ロマン派の声楽曲の演奏実践研究を行う。
- ③朗読や会話における発声についての比較研究を行う。

2. 点検・評価

- ①バッハのカンタータ演奏は、松山と神戸で行い、またヨハネ受難曲の演奏を広島と松山で行うことができた。
- ②ドイツ・ロマン派の声楽曲に関しては、鳴門市ドイツ館で演奏会を行った。
- ③後期に開講した広領域コア科目「教師のための声とからだことば」において、朗読や会話と歌唱との比較研究をもとに授業を行い、研究の成果がこの授業の中で生かされた。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

- ①芸術系コース(音楽)のコース長として、コース全体の協働体制がスムーズに行われるようなマネジメントを行う。
- ②「エコアクション21」に対して積極的に参加する。
- ③各種委員会委員として、大学の将来を見据えたヴィジョンを持って、必要な役割を果たしていく。

2. 点検・評価

- ①コース長として、コースの教員全員が協働体制をとれるように、連絡方法や役割分担等を工夫した。
- ②「エコアクション21」に関しては、常日頃から積極的に参加し、エネルギーの無駄使いや、再生資源の利用等を計った。
- ③大学院入試委員として、京都と大阪において大学院の入試説明会で大学の特色や大学生活について説明した。また施設整備委員として、本学の将来のことを考えながら様々な意見を述べた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

これまでも行ってきた公開講座の開催, 教育支援講師・アドバイザー等派遣事業や地域における文化事業に積極的に参加する。

- ①公開講座「楽しい歌唱教室」を通して, 現職教員への実技指導, また地域社会の音楽文化の発展に貢献する。
- ②NPO法人鳴門第九を歌う会の理事及び合唱指導者として, 地域社会の音楽文化の発展に貢献する。
- ③演奏を通じて, 地域社会の音楽文化の促進に貢献する。

2. 点検・評価

- ①公開講座「楽しい歌唱教室」を9月に開講し, 一般社会人や現職教員への声楽実技指導を通して, 地域社会の音楽文化の発展に貢献した。
- ②NPO法人鳴門第九を歌う会の副理事長及び合唱指導者委員長として, 「第九」の演奏を通して地域社会の音楽文化の発展に貢献できた。
- ③声楽の演奏会を各地で行い, また鳴門市をはじめ三好市や阿南市の合唱団の指導に関わり, 音楽を通じて地域社会の文化の促進に貢献できた。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

芸術系コース(音楽)の教員数は現在7名で, 設置審ベースの限度数で且つ音楽科教育の教員が一人足りないという状況に置かれている。そのような厳しい状況の中で, さらに1名は副学長として執行部の仕事を兼務しており, コース運営をまとめるコース長としては, コース内のチームワークを最大限生かせるように努力した。出張等で長期間大学を留守にしなければならぬような場合でも, インターネットや携帯電話を活用し, 必要な連絡がお互いに取り合えるようなシステム作りを整えた。その結果コース運営はこれまでにない良好にできたと考えている。